

何よりも害をなさぬこと

須磨忠昭

メディアーク経営研究所代表

人の命を救うはずの手術や投薬が、逆に人の命を奪う凶器になることも時にはある。私たちは不安で仕方がないが、医療はもともと、こういう風にとっても危険なバランスの上に成り立っているのだ。というのも理由はいとも簡単で、医療行為の多くが世の中で言う傷害や暴行と全く同じ形をしているからだ。たとえば他人の胸や腹部をメスで切り開いたり鼻にチューブを突っ込めば、世間では明らかに暴行傷害や殺人的行為だ。ところが医療の世界ではこれを手術とか療法と呼び、国家の免許を持つプロの医師や看護婦が、相手(患者)から同意をとりつけてさえいれば、賞賛すべき崇高な人道的救命行為になる。

しかし、行為そのものは、呼び方かどうであれ、まぎれもなく傷害であり、免許や相手の同意があろうとなかろうと、医療スタッフが他人に危害を加え、しかも新しい苦痛も与えるという「加害者」の立場に立っていることは確かだ。だから彼らは、この立場の認識と行為そのものの殺傷性ゆえに、「何よりも害をなさぬ」と誓う。これはスタッフの良心であり、他人(主に患者)に害を与えていることへの「原罪的」な意志表明でもある。

しかし残念だが、医療活動の中でこうした良心が生かされることは少ない。なぜなら、人が原罪や加害意識を感じるためには、その人の中に自己否定の想像力が求められるのだが、国家資格(免許)や専門エリートの特権などで保護されている医療とその行為には、自らを絶対視したり自己肯定する仕組みはあっても、自分を否定したり抹殺するメカニ

ズムは働かないからだ。

さらに医療が、④救命至上、⑤技術至上、⑥臨床至上、を善としていることもひとつの要因である。つまり、④命を救うことが何よりもまず第一で、そのためには傷や痛みの1つや2つ仕方あるまい、⑤したがって問題は手術の傷跡を小さくしたり、注射の痛みを少なくするような医学的テクニックが大切だ、⑥病気を治すために、肉体の苦痛はもちろん、自尊心やプライバシーが守られないことも多少がまんしてもらわないと、というような医療である。これらに共通することは、患者への慈悲と配慮の欠落であり、裏を返せば、独断とごう慢さである。これでは“害をなさぬ”と誓ってもらっても、果たして約束を守ってもらえるのか、私たちには不安なのだ。私たちは病気を治したいし、死にたくはないともちろ

ん思っているけれど、でもそれ以上に、「この激しい腹痛が今消えるなら死んだっていい」と感じるくらい、死ぬことより肉体の痛みのほうが本当につらいことを知っている。

医師や看護婦は治癒や救命を最も優先すべきだと思っているだろう。でも、痛みの部外者である医療側には、治療や処置を行なう前に、“痛み”への想像力を持ってほしいのだ。

なぜって、痛みを知る者と知らない者との共感には、痛みへの“想像力”しかないのだから。入院経験をもつ医師は本当に患者の痛みを知っているだろうが、そういう先生しか患者への想像力を持ち得ないというのなら、あまりにも淋し過ぎはしないだろうか。

